

## 春のWAKUWAKU映画まつり 2019

ネタバレ満載!WAKUWAKU映画紹介

### 大法螺の鳴る丘

監督: Leonard Bertolucci

真実は嘘の向こうに



原作は、伊ミステリーの傑作「大法螺の丘 -fine-」。「大法螺のなる丘」は全40冊。古典ミステリー10選に入らずとも50選には必ず名前の上がる名探偵シリーズだ。羽ばたくように両手をたたく独自のポーズが人気のこの風変わりな探偵は、ミステリーの主人公には珍しく、特定の相棒を持たない。その時たまたま居合わせた通りすがりの人物をワトソン役にして事件を解決する。事件が終わればワトソンとも別れ、その後は連絡を取り合う事もない。警察に知人もいないし行きつけのコーヒーショップもない。古典的なミステリーシリーズのアンチテーゼと読むこともできなくはないが、そういう解釈は、この作品の楽しみを狭めてしまうだろう。生活は一切が謎に包まれており、元詐欺師という噂も、出どころは不明だが妙に説得力がある。とにかく嘘をつくのが巧いのだ。水面に踊るあめんぼのように、ただそこにある言葉だけをよすがに進んでいく。嘘に嘘を重ねていくうちに真実にたどり着いてしまう。

“ほんとうの事には理由がない。”

真実が知りたければ嘘の裏を探れ”

人気シリーズ小説の「最終章のみ」の映画化は、当時原作ファンにも映画ファンにも大きな衝撃を与えた。ファンは、ヒーローがどんな風に生き、どんな道を通ってそこへ至ったのか、その過去を追体験したいのだ。しかしこの作戦は成功した。映画を観た者は皆思ったのだ。根無し草の根の源を追うなど野暮なことだと。

(1970年 1979年 原作:大法螺の鳴る丘 -fine-)

### オープン・ザ・ドア

私たちは、どこへ向かっていくのだろうか



表層的には「超低予算のキッチュなアメリカ風時代劇」だが、日本・アメリカだけでなく、世界中に熱心な支持者がいる。この作品の裏の(真の?)テーマである「異文化の対立と共存」が国や文化を超えて映画ファンの心を揺さぶるのだろう。ストーリーは単純で、ふたつの美意識に翻弄されるひとりのAssassinの姿を描いている。主人公は、自分の良心と折り合いのつかない助けを拒み、物語の半ばで死んでいく。豊臣秀吉と千利休の確執になぞらえて描かれているが、ハリウッドに代表される欧米の商業主義的文化の前に散る小国の文化の矜持を描いているようにも見える。主人公の根底にある「美意識」は、茶の湯にヒントを得たものであり、細部がかなり奔放ではあるが、日本文化になじみがあればなんとなく推察できる。一方で茶席をティーパーティと訳し、茶器の披露を女子会の化粧ポーチのみせっこのように描く下りなどは「茶の湯といえ古い伝統」という刷り込みのある日本人には新鮮に映るだろう。なかなか日本で劇場公開されない作品。この機会にぜひ、味のある映像をスクリーンで楽しんでほしい。(2012/アメリカ合衆国) 監督: Emma Davidson

### アメイジング・スペース

監督: Táňa Lipovský

探さなかったものがみつかることもある



人類が初めて月面着陸して以降、フィクションの世界でもたくさんの宇宙船が宇宙へ旅立っていった。現実には追いつかれまいと小説も映画もこぞって最果ての地を目指した。この映画は、まさにその元年に公開されている。外部の変化を柔軟に受け入れて適応し続けるために、生き物は集団を組織する。世界との間にすきまをつくり、アクシデントに備えるのだ。しかし、誰が何に適応すべきなのかは時代とともに移り変わっていく。激しい世相の変化の中で、個と集団を巡る状況は変わり続けた。当時とそれ以前、その後、さらに2019年現在では、この物語の受け取り方は全く違うものになっているだろう。時代だけ

ではない。国や文化によっても。あの星の決断は、何に対して正しく、何に対して間違っていたのか。

SFの形をとることで、この荒唐無稽な物語はむしろ特定の思想に収まらない普遍性を得た。どんな環境でも逃れられない、個と集団の対立と共存について普遍的に描き出している。この映画が長く愛されている理由の一つだろう。オープニングのモノローグは意味深だが、何の暗喩なのかについては解釈の別れるところだ。

<story>

故郷の星から遠く離れた小さな惑星で新しく生ききなおそうとした主人公の女性は、結局、新しい場所に溶け込むことができず、過去から逃れられないまま有害生物として宇宙へ流される。新しい場所は、深刻な食糧危機で、外から新しく人を受け入れる余裕がなかったのだ。主人公を乗せた宇宙船が誰も知らない宇宙のかなたで爆発するところで、映画は終わる。(1969年 1970年 原作:「すごい宇宙」)

### Xからの手紙

監督: Park Seo-Yeon

Xであるということ



難解な映画である。

物語が執拗に追うのは、ただただ、存在と認識について。その、可能性について。

誰ともうまくコミュニケーションのとれない主人公は、誰かに語り掛けるたびに失敗を繰り返かえす。それでも彼が決めてあきらめずに、同じことを繰り返す理由が、動機が、観客にはわからない。彼が最後まで抱えているのは希望なのか絶望なのか…主人公の死後もそれは続く。書き残した言葉さえも誰にも届くことなく、誰にも理解されることなく、虚空をさまよう。映画のラストで、主人公の書いた手紙はようやく、意味のある言葉として、それを必要とする場所へ届く。命に代えても手紙を残そうとした彼の気持ちがようやく報われたのか…?

だが、それは生前彼が望んだ形とは違っていった。主人公の手紙は、全く別の人間の言葉として、それを待つ人のところへ届いた。

その言葉はたしかに誰かを救ったが、そのことで彼が救われることはなかった。

彼にとって、言葉は生涯、いや、永遠に、自分分のためのものではなかった。この映画にはもう一つ、特筆すべき点がある。すべての登場人物に名前がない。あるのかもしれないが、最後まで名前を呼ばれることはない。そしてそのことに観客は映画の終盤まで気づかないのだ。

(2008年 韓国)

### インターミッションコンプリート 完結編

何かであることの意味



このチャーミングな主人公の活躍を見ることのできる最後のチャンスだ。皮肉なことに、これまでずっと傍観者であり、事件の語り手であった彼女が本当の意味で主役になった時、彼女の物語は完結してしまうのだ。

この程度の危機はこれまでもあったのに。ちょっとしたミスも、これまで何度もあったのに。タイミングの悪さも、不幸な偶然も、これまで何度もあったのに。その場所からすべてを見ていた目がなくなった時…それは誰が何を失った瞬間なのだろうか。映画館が好きで、一日を主に映画館の座席で過ごす。映画は見たり見なかったり。探偵小説のファンで、探偵のまねごとをしてよく事件に巻き込まれる。

ひらめいた瞬間に両手の指をチョキにして内側に曲げる癖があり、この特徴的な癖はまるでシリーズものの探偵小説の主人公のようだと、本人は気に入っている。

ずっと主人公を演じてきた女優の引退によって映画が完結するというのも、この作品らしい終わり方なのかもしれない。

(1988年 スウェーデン)

監督: Robin Roman

### レフトオーバー・フッテージ

なにがともなかつたかのように再び始まるまで



こういう映画がもっとあってもいい。タイトルの